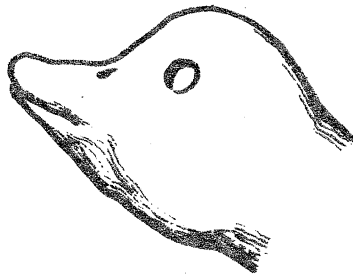


奈良バイパス路線敷地発掘調査概報

第54. 55. 56. 57次調査



昭和44年9月

奈良国立文化財研究所

表紙カット

平塚1号墳出土水鳥埴輪

平城宮第54.55.56.57次発掘調査概要

奈良バイパス路線敷地の調査は、平城宮内を通過する予定路線の変更にかかるもので、建設省が費用を負担し、奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部が実施している。発掘地は北から54、55、56、57次となっており、うわなべ古墳東周濠上から一条高校東隣りにいたる地域である。

各次別の調査地区名、面積、期間は次表のとおりである。

調査 次数	発掘地区	面積 m^2	発掘期間
54	4PUN-0.P	400	昭和44年2月13日 ～昭和44年4月3日
55	6AFB-I~J	1,975	昭和44年3月24日 ～昭和44年5月16日
56	6AFB-F~H	3,150	昭和44年6月2日～
57	6AFB-C~E	6,497 (予定)	昭和44年7月9日～

I 第54次うわなべ古墳周濠の調査

うわなべ古墳は、墳丘の長さ254m、濠の部分を含めると全長400mに達し、全国でも有数の巨大古墳である。そしてその周濠は、墳丘の規模からして、幅がひろすぎ、したがって、後世水田灌漑池として拡張されたのではないかとみられてきた。

しかし、今回の調査で、濠の規模は当初とほとんど変わらず、むしろ東北部では、もっと外から周濠の堀り割りになされていたことが明らかとなった。あわせて、現在のような灌漑用溜池としての滞水状態は平安時代末以後であることも確認できた。

今回の調査は、24号線バイパス敷地にあたる濠内と濠の周堤の東北部部分に、約80mの間隔をおいて南と北に岸線に直角に発掘溝を2本設定して行い、周濠外側の岸の検出に努めた。その結果、いずれも、現在の

岸から 10m 内側。濠底より 4m 深い所で周濠外側の岸の葺石(基底部)を検出した。葺石は約 2m 幅で残存しており、その落石の状態から、岸の基底部しか行っていないと推定された。北においては、岸の上端は、現在の岸より 4m ほど東へよっており、中世以後一部埋め立てられている。検出した岸は全体としてゆるい傾斜をなしているが当初は中段をつくっていたと考えられる。

濠内に 4m も堆積していた埋土の状態をみると、大きく上・下に分けられ、それぞれ堆積の条件が異なっている。下層部分は荒い砂と水草の腐殖土が互層になっており、かなりの流れがあったうえの堆積である。上層部分は、水草の腐殖土の粘土化したものと微砂粒が水平に互層になっており、現在の灌漑池のようによどんだ滞水状態で堆積したものである。したがって、下層上部堆積の年代の上限が出土した平安末の灯明皿で、堆積できることから、現在のような、うわなべ古墳周濠の灌漑池としての利用は、平安末以後ではないかと考えられる。

II 第55次発掘調査

第55次の発掘調査は、国鉄関西線の西側にそったバイパス敷地予定地の部分で行なった。平城京の条坊でいえば一条三坊十六坪にあたる地域である。検出した主な遺構は、前方後円墳(基く平塚第1号墳)と古墳築造以前の溝1条、その他、奈良・平安時代の建物址8棟分、柵址2条、溝2条、井戸などである。

前方後円墳は、所謂帆立貝式と呼んでいるもので、平城京造営の際、後円部の一部をのこして削平され、基底部しか検出できなかったが、葺石は比較的良好的な状態で残存していた。今回の発掘では、その前方部と後円部の一部を確認できた。後円部の大部分は、関西線をこえて東方の不退寺の旧寺域にのびているとみられ、関西線はまさに後円部の中央を分断している。後円部と前方部の接続部が、わずかに小丘として残存しており、その部分において、後円部と前方部をめぐる埴輪列の交点部分、築成部第一段の平坦面と敷石とを検出した。また基底部に近いところか

ら盛土され3段築成の墳形を有したことが推定される。検出した前方部は西向きで長さ20m、基底部幅は30mある。連続する後円部分のカーブから後円部径を復元すると約50mほどで、全長約70mの規模の長軸を東西にした前方後円墳となる。

この古墳には周濠がめぐっており、北方では濠幅は16mほどであった。他の部分は発掘区域外で確認できなかったが、おおよその規模は復元できる。濠内の埋土中からは、円筒埴輪、水鳥などの形象埴輪を検出した。基底部の葺石は当初に近い状態で認められた。葺石の最下部は比較的大きな石をならべて補強し、また葺石を2~3mおきに区劃するしきり石列の状態も認められた。

この古墳築成以前に、断面V字形の溝が、北から前方部を横断するようにして南へ流れている。埋土は黒褐色で、遺物は検出できなかった。

奈良時代以後の遺構は主として、調査区北側と南側とに集中しており、おおまかに5期に分けられる。A・B・C・Dまでは奈良時代で、Eは平安以後である。

A期 一辺1mほどの柱の掘り方を検出したが、調査区外の南へ同様な掘り方が連続しているようで調査区内では建物としてはまとまらない。

B期 2間×2間、三行三列全部に柱を配した建物1棟がある。

C期 底に敷石した井戸と、調査区南方（I区）を斜めに横切る溝1条である。それにとみなう建物は認めることができなかった。

D期 4間×5間の南北廂のある東西棟の建物1棟と溝2条である。溝のひとつは、I区にあって、東西棟の建物の雨落ちとして附設しており、途中でL字状に折れて南の調査区外へのびている。他のひとつはJ区にあって複雑に折れまがりながら南へ流れている。I区の溝とJ区の溝の間は調査区外にあり、確かめえないが連続する可能性がある。

E期 建物3棟、柵1条。建物はいずれも柱穴が小さい。I区北側の所に2間×3間のもの、J区に2間×4間と2間×3間のものがある。その他の遺構は、時期の推定が困難である。

Ⅲ 第56次調査

第56次調査地域は、道路予定地のうち、うわなべ古墳東南方の第55次調査地に南接し、一条高校の北端にいたる範囲である。調査は昭和44年6月よりはじめ、現在なお進行中である。これまでに古墳時代・奈良時代・平安時代の各遺構、遺物を検出している。ただし、今回の調査が道路敷地内に限られたこともあって、建物などの規模については未確認のものが含まれている。

A古墳時代 G・H地区に前方後円墳の前方部、周濠の一部を検出した。これをかりに「平塚2号墳」とよび、第55次調査で検出した「平塚1号墳」と区別する。

古墳の主軸は東西方向で、前方部は西向きである。前方部前端巾3.9m、前方部長（検出分）2.1mある。後円部と前方部の一部はすでに国鉄関西線および不返寺西側池によって削平されており、全体の規模は不明である。墳丘は、濠基底より高さ1m分が残存する。墳丘斜面には葺石がある。周濠巾は前方部前立部分で7m、前方部側辺で8mある。

平塚2号墳の主軸は平塚1号墳のそれと平行しており、検出部分での周濠間距離は7mある。かりにこれを平塚1号墳と同じ帆立貝形前方後円墳と推定すると、全長は約92mとなる。

円筒埴輪、水鳥・動物・短甲・楯形埴輪が周濠内より出土した。これらの遺物は平塚1号墳出土のものによく似ている。

B奈良時代 掘立柱建物16棟、柵2条、溝3条、井戸2基、庭園などを検出した。建物は調査区北端と南端に集中し、前者は55次調査で検出した建物群の延長部分である。建物規模は大小あり、柱間寸法は10尺～5尺のものまである。1間×1間・1間×2間の平面小形建物、縦行一間の細長い建物が目立って多い。主な溝には、55次検出南北溝の延長部分がある。この溝は建物群の東側を通り、二流に分かれて古墳周濠あとの凹地に注いでいる。溝中からは土器・木簡・木質遺物を多数発見した。

井戸には直径 75cm の曲物を重ねた丸井戸・縦板を枠で固定する角井戸の二種がある。

庭園の一部と推定するのは、古墳の前方部南隅の葺石斜面および濠を洲浜に利用し、大形の石 5 個を配置して小規模な園池をかたちづくるものである。

以上の各遺構の大部分は古墳の上部を削平し、周濠を埋めたてた整地層上にある。整地は奈良時代初期と後期の二度にわたっている。また F 地区は推定条間大路上にあたるが、前述のように建物群を検出し、側溝・築地塀などの施設は検出できなかった。

C 平安時代 H 地区の整地層上に掘立柱建物二棟、柵二条、東西方向細溝多数がある。溝からは緑釉・灰釉・土器が多数出土した。また、F 地区推定東三坊大路上の西部には南北溝がある。巾 5m の複雑な流路をもつものであり、57 次調査検出の大路東側溝とは性格を別にすると思われる。

以上第 56 次調査で検出した遺構について畧述したが、本調査で平塚 1 号墳につづいて、ほぼ同規模の古墳を発見したことは佐紀盾列古墳群に新しい資料を加えることになった。また、検出建物のうち、沼行一間の細長い建物はこれまでの宮内建物に見られないものである。奈良時代の庭園については、平城宮東南隅（平城宮第 44 次調査概報）でみつけた庭園につづいて二番目の例である。この一副に庭園を備えた邸宅の存在を推定出来るが、今回検出の奈良時代に属する掘立柱建物群はその一部であろうか。

IV 第55.56次調査地区の遺物

第 55・56 次調査地区で出土した遺物には、土器（須恵器・土師器）・埴輪・土馬などの土製品・瓦・木製品・木簡がある。

土器は古墳時代から奈良・平安時代にかけてのものであって、三彩薬壺や緑釉陶器をふくんでいる。墨書土器には「尼家」・「口田加和銅」と記するものがある。

埴輪は、平塚1号墳・2号墳にぞくするものであって、ともに円筒のほか、破片ではあるが、楯・水鳥（表紙カッタ）を出土しており、このほか1号墳には蓋・家、2号墳には鎧がある。1・2号墳の水鳥埴輪はたがいによく似ており、両古墳の年代の近さをしめしている。

瓦には、変った文様の軒丸瓦がある（第3図1）、単弁13弁であって、中弁には珠文なく、6弁の花弁をおく。さらに、周縁には唐草文をめぐらしている。この型式は、いままで平城宮跡では発見していないが、不返寺では出土例がある。この軒丸瓦と組み合わせる軒平瓦も出土している。この他に瓦を例検出している（第3図4）

V 第57次発掘調査

第57次の発掘調査は、一条高校の東側にそった、24号バイパス予定地で現在行なっている。京の糸坊でいえば、東三坊大路域にあたる。現在まで検出した主な遺構は、東三坊大路の東側溝と柵一条である。東三坊大路の側溝は、のこりの良い所では断面V字形をなしている。側溝は、出土する遺物からみると、平安時代（9世紀中頃）に、奈良時代の側溝の痕跡を残さないほどに改修されており、この大路区域の活用度が高かったことが知られる。側溝は埋土の状態から、9世紀中頃から10世紀初頭頃まで、同一流路の中で、三回の劃期をもっている。それは貞観永宝を上限とする下層の時期、寛平大宝を上限とする中層の時期、それ以降の上層の時期である。いずれも土器・木器など生活用品の出土が豊富であり、この地域の生活活動が盛んであったことがうかがえる。

柵は一条通りと糸間大路の中間にあたる糸間小路域に、南北方向に走っている。途中柱がなく、約9mの間隔ができるところがあり、ちょうどその部分が糸間小路と推定される位置になる。

VI 第57次調査地区の遺物

第57次調査地区で出土した遺物には、土器（須恵器・施釉陶器・土師器・黒色土器）・瓦博・土馬などの土製品・金属製品・木製品・漆器

・石製品、および、別項であつかう木簡がある。他に、木炭と堅果（モモ・クリ）・ヒョウタンなどの植物遺体、馬の骨などがある。これらは、大部分が東三坊大路東側の溝から出土したものであって、9世紀後半から10世紀前半にぞくしている。

土器 須恵器・土師器・黒色土器のほか、多数の施釉陶器の存在が目立っている。緑釉陶器は160個体分ある。硬質のものと軟質のものとがあり、椀（第2図5）・稜椀・皿（第2図4）・段皿・三足盤（第2図3）などの種類がある。花文様を陰刻したものが数例ある。灰釉陶器は275個体分ある。椀・双耳椀（第2図1）・皿・段皿・耳皿、把手つき瓶（第2図2）・平瓶をはじめとする各種の瓶がある。黒色土器には、椀・皿・杯のほか、碗もふくまれている。

東三坊大路東側溝出土の土器類は、平城宮跡で出土する8-9世紀初頭の土器につづく年代、すなわち9世紀後半から10世紀前半にぞくするものである。畿内で、生活の場から9世紀代の土器がこれほど多量に出土したのは、はじめてである。今回出土した灰釉陶器は、胎土・釉・形態・種類などで、愛知県猿投山古窯跡出土品とよく似ている。猿投山の窯は、10世紀の初めに日常什器に施釉を開始し、灰釉陶器が隆盛したのは、10世紀中葉以降11世紀代にかけてであったと考えられてきた。しかし、今回の第5ク次調査の発見資料によって、灰釉陶器の盛期を9世紀代にさかのぼらせることも可能になった。東三坊大路東側溝で出土した土器類は、今後、平安時代の土器、とくに施釉陶器の研究に重大な問題を提起するであろう。

瓦埴 瓦1種（第3図3）と重圈文軒丸瓦・重圈文軒平瓦（第3図2）がある。なお、「右」の逆字をもつ重圈文軒丸瓦が1例ある。これは、難波宮跡で多く出土し、また長岡宮跡でも出土している瓦と同範である。埴は、平城宮出土例とかわらぬ種類のものである。

金属製品 金属製品には、銅銭・帯金具・刀装金具・鋏・釘・座金具・鍍金飾板・針金などがある。

銅銭は、和同開珎・萬年通寶・神功開寶・隆平永寶・富壽神寶・承和

昌鑿・長年大寶・饒益神寶・貞觀永寶・寬平大寶，すなわち，皇朝十二錢のうち，十世紀にぞくする最後の二種（延喜通寶・乾元大寶）をのぞくすべてを網羅しており，計 400 枚ある。ほかに唐の開元通寶が出土した。なお，宋の元豊通寶もあるが，これは清以外からの出土品である。

木製品・漆器 木製品の内容は，多種多様である。D・E 区の出土品のうち，点数の多いものをあげると，下駄 50，曲物蓋・底板 108，折敷 37，^金盆^{（赤銅？）} 15，「けずりかけ」かうの串 41 がある。その他，しゃもじ，さじ，はし，ざる，紡錘車，糸巻，きぬた，鎌・刀子の柄，くさび，木針，むしろ編みのおもり，火きり臼，檜扇，かんざし，人形，剣形・刀子形木器などがあり，また，特殊なものとして，飛ぶ鳥を墨で画いた板と火焰宝珠形の板とがある。火焰宝珠形の板（裏表紙カッター）は，高さ 13.8 cm，火焰は赤彩し，宝珠と蓮弁とを墨でえがく。下端には挿入のための突出をつくる。

清出土の木製品は，平城宮跡出土の木製品と比較してそうはかわらない。しかし，下駄の数が多くは目立っている。また，下駄を前・後方からみると，歯の下部が台形にひらく形式にぞくするものが大多数をしめる。これも平城宮跡出土例と異なる点である（第 2 図 8）。

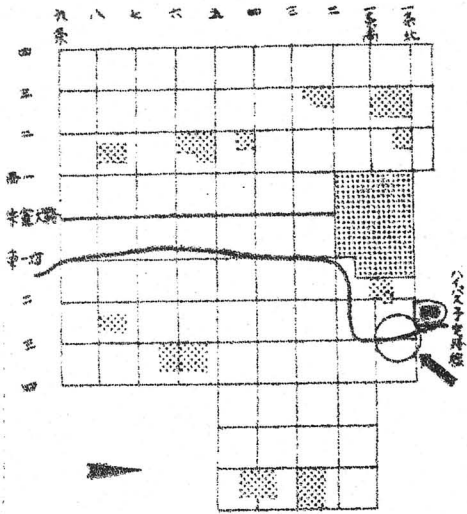
漆器は 29 個体分ある。皿（第 2 図 6）・盆（~~第 2 図 7~~）・椀・高杯などがある。黒漆をかけたもののほか，内面に赤漆をかけたものが 2 例ある。漆器の皿には，緑釉陶器の皿と同型のものがあって，両者の関係が注意をひく。（第 2 図の 4 と 6）

石製品 石帯・丸玉・礎石がある。このほか，弥生式時代にぞくする，挿入柱状片及石斧が 1 個出土している。

Ⅶ 第 55・56・57 次調査地区出土木簡

第 55 次調査—4 点，第 56 次—9 点，第 57 次—18 点（9 月 6 日現在）の木簡を検出している。出土木簡の主なものを以下にかかげる。

平城京条坊模式图



国道24号奈良東バイパス路線事前調査
 架設選定路線圖 [第55・56・57次調査]



一
条
大
路

東 三 坊 大 路

バイパス路線

路

國
鉄

間

西

本

路

6AFB

F

G

H

C

D

E

条

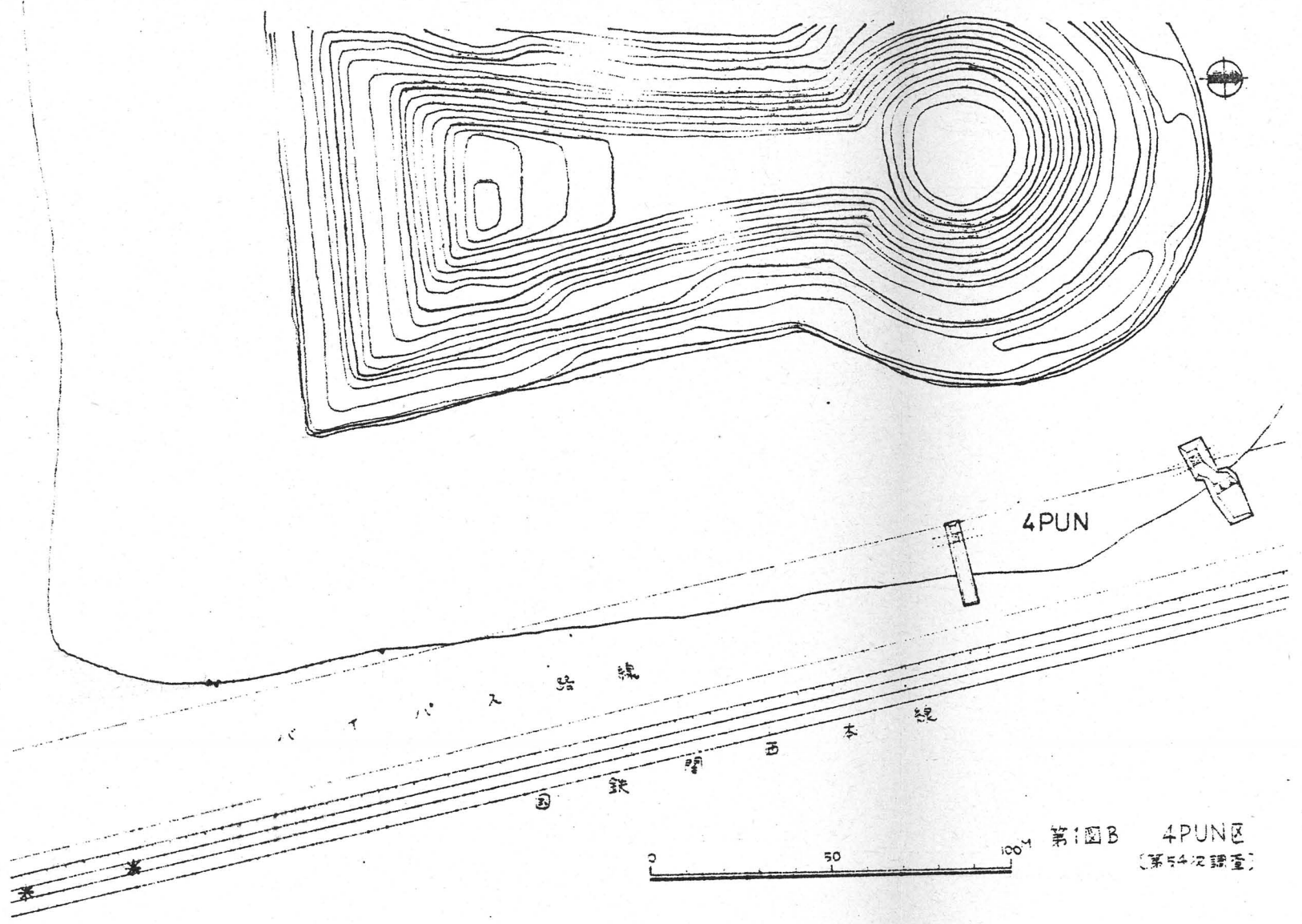
大

平塚1号

平塚2号



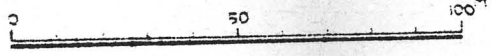
第1図A 6AFBE



4PUN

入心

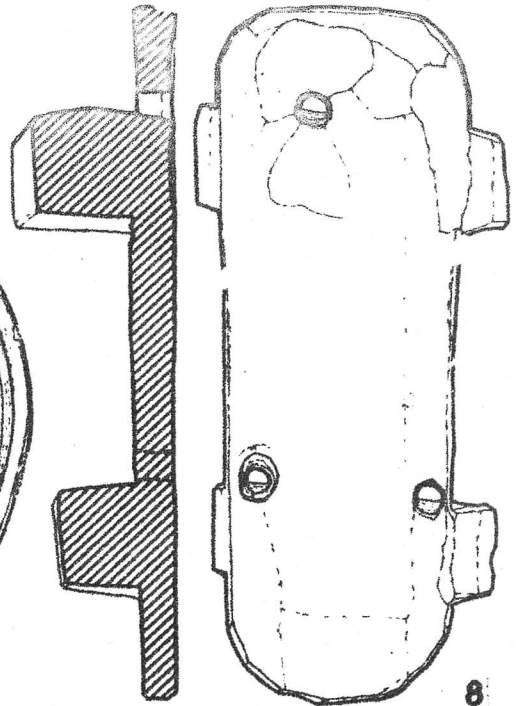
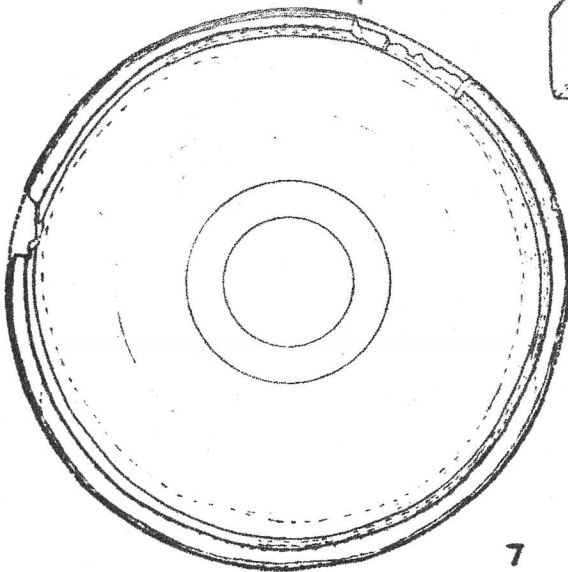
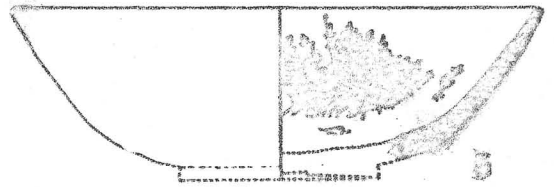
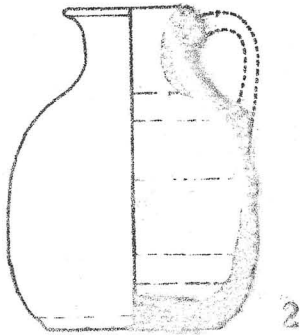
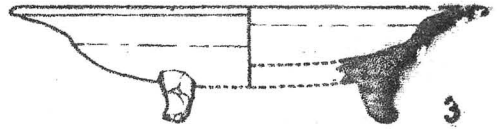
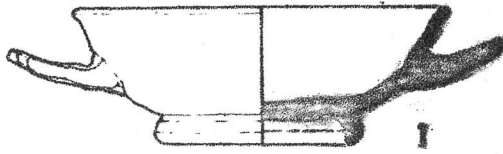
日本鐵道



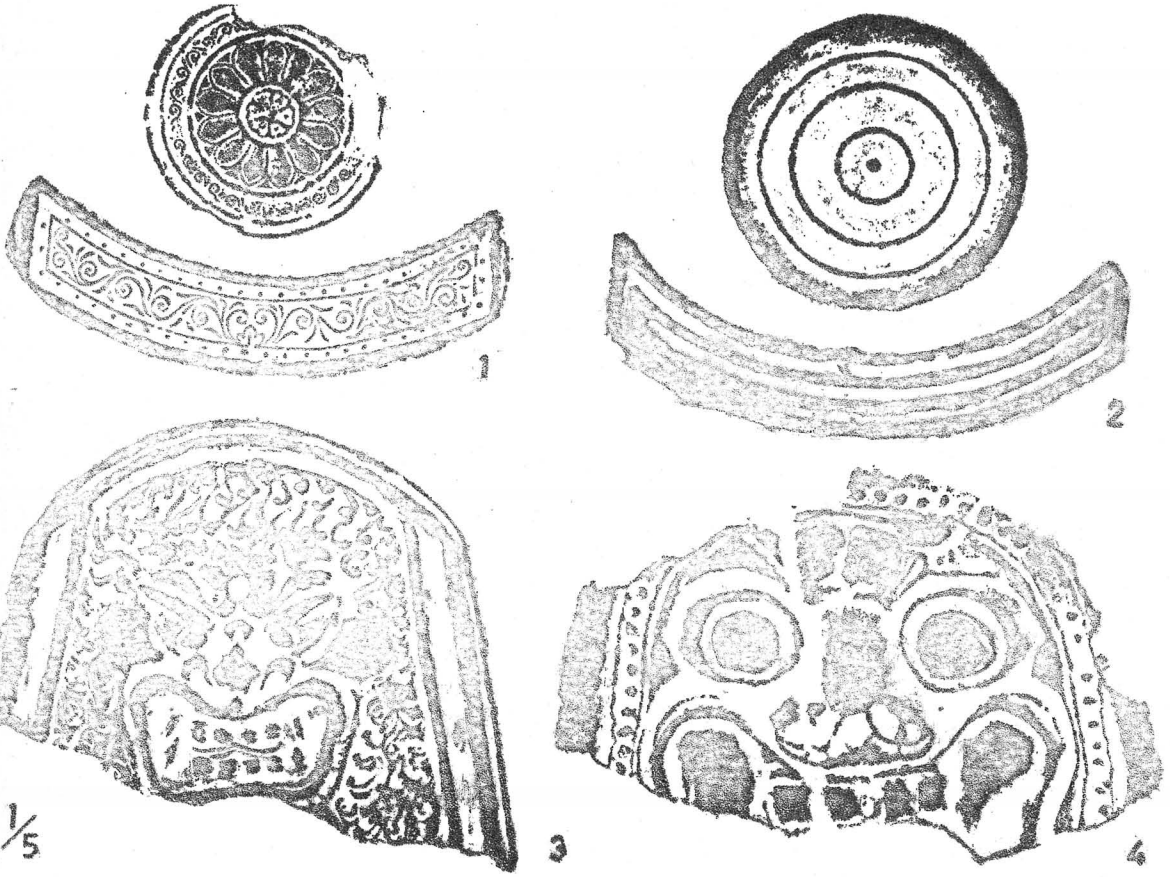
第1圖B 4PUN區

(第54次測量)

第2図 土器・木製品



第3图 瓦



第2图

- 1 · 2 灰釉陶器
- 3 · 4 · 5 绿釉陶器
- 6 漆器皿
- 7 盆
- 8 下駄

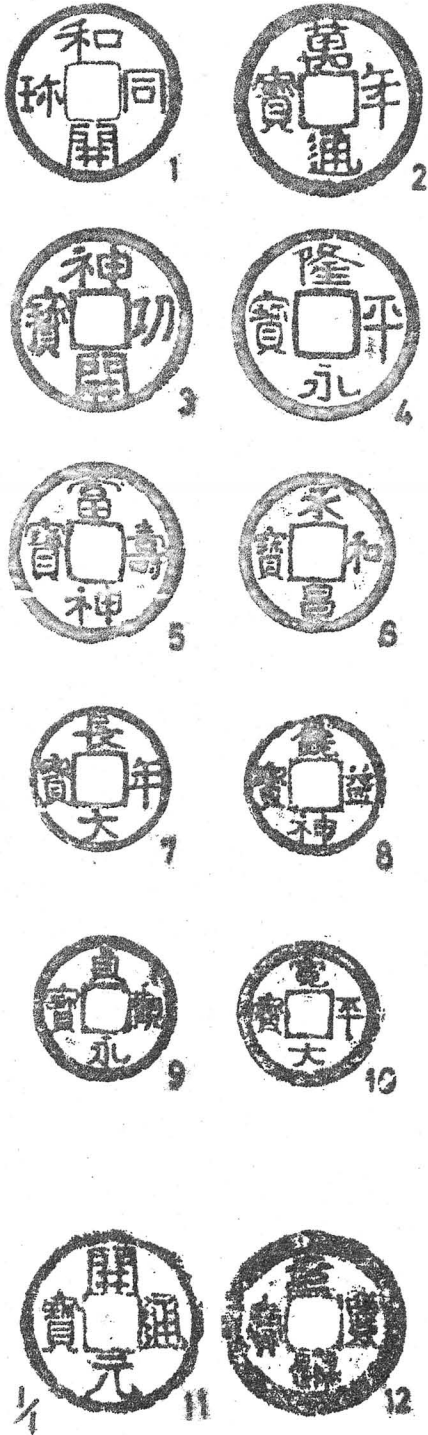
(以上57次出土)

第3图

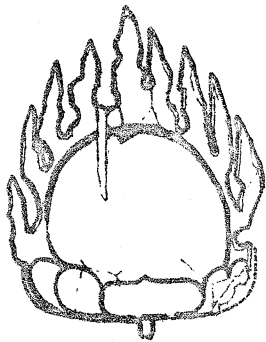
- 1. 57次出土軒瓦
- 2. 57次出土軒瓦
- 3. 57次出土鬼瓦
- 4. 55次出土鬼瓦

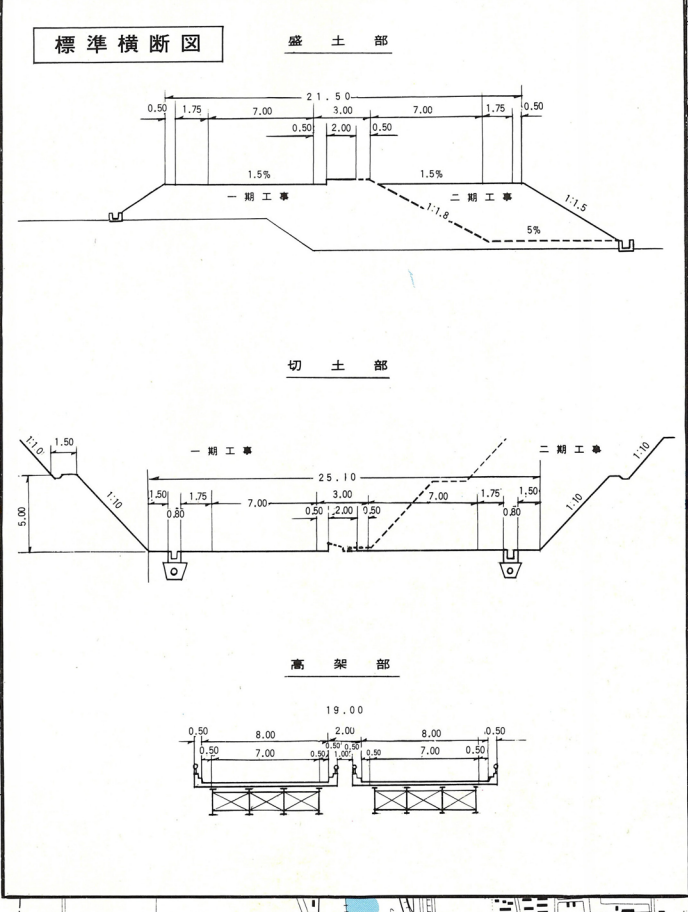
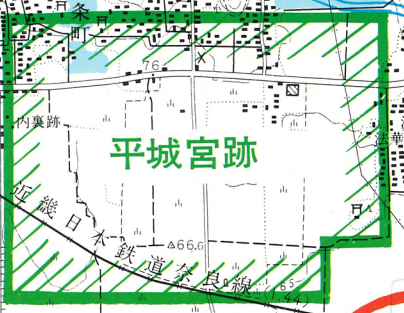
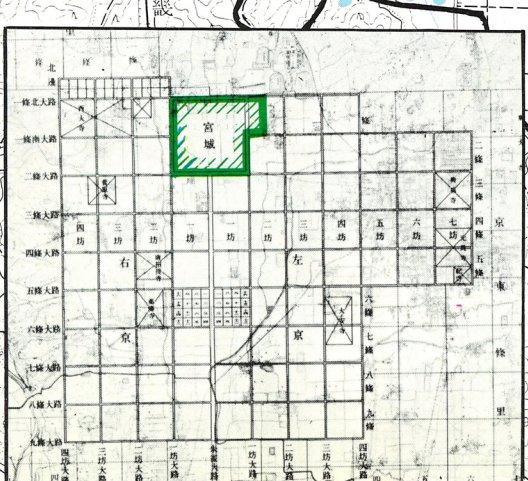
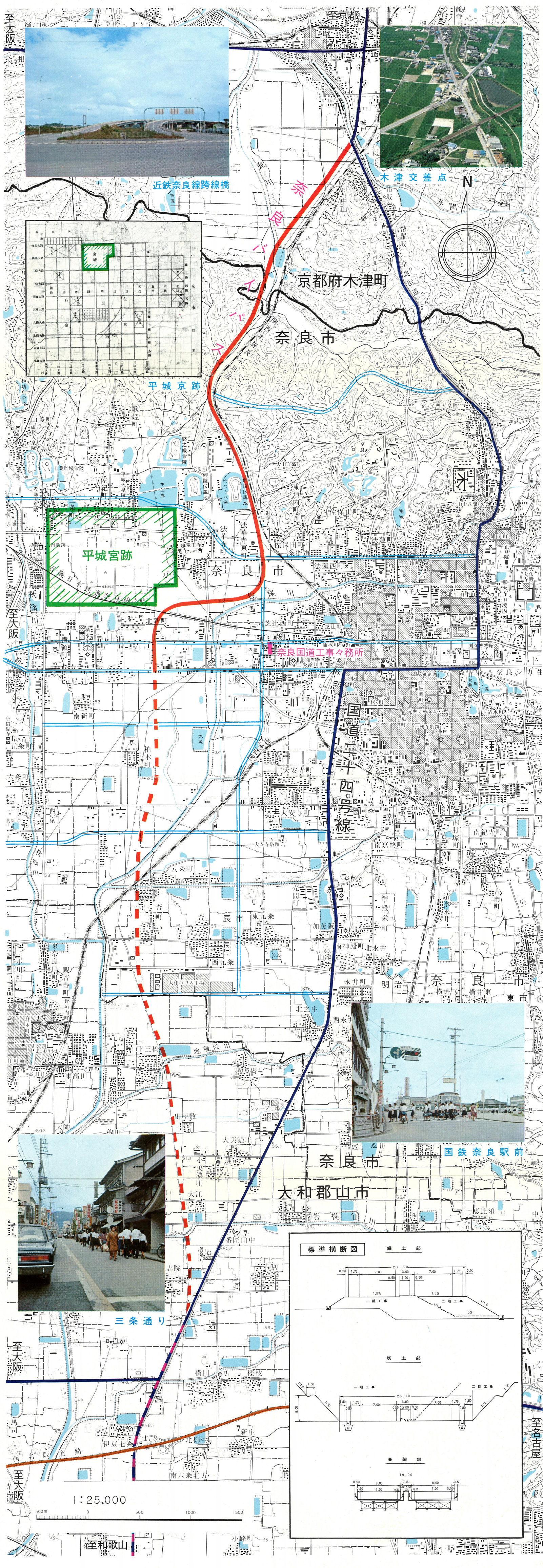
第4圖 銅錢

皇朝十二錢



- 1 和同開珎 和銅元年 (708)
- 2 萬年通寶 天平寶字4年 (760)
- 3 神功開寶 天平神護元年 (765)
- 4 隆平永寶 延曆15年 (796)
- 5 富壽神寶 弘仁9年 (818)
- 6 承和昌寶 承和2年 (835)
- 7 長年大寶 嘉祥元年 (848)
- 8 饒益神寶 貞觀元年 (859)
- 9 貞觀永寶 貞觀12年 (870)
- 10 寬平大寶 寬平2年 (890)
延喜通寶 延喜8年 (908)
乾元大寶 天德2年 (958)
- 11 開通元寶 唐、武德4年 (621)
- 12 元豐通寶 宋、元豐元年 (1078)





1:25,000

至和歌山

至名古屋

ごあいさつ

秋も深まり奈良の自然も一段と美しくなってきました。皆様には、ますます御清祥のこととお慶び申し上げます。

かねてより建設中でありました、国道24号線奈良バイパスの一部区間がこのたび完成し、十月一日より開通をみるはこびとなりました。

今回の開通区間は、奈良バイパスのうち、北部約六、五詰（奈良市尼ヶ辻町から京都府相楽郡木津町まで）ではありますが、路線位置などについて、奈良県、奈良市、文化財保護委員会などのご当局と協議をはじめから九ヶ年、昭和四十四年七月、本工事着手以来二年三ヶ月の歳月を要しました。

この間、関係各位ならびに二百数十名に及ぶ用地提供者の方々の御理解と御協力により開通の日を迎えることができ、深く感謝の意を表する次第であります。

この道路は、更に南へ七詰の建設工事を残しておりますので、引きつづき完成に努力する所存でありますので、一層の御支援と御指導を賜りますようお願いいたします。

一部開通にあたり略儀ながら、書中をもって御礼申し上げます。

昭和四十六年九月二十五日

建設省近畿地方建設局

奈良国道工事々務所長

田 尻 孝 夫

坪井部長 殿